● ビブリオテーカ ●

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No.8
2012.10

学生生活と大学図書館—イリノイ大学での経験

国際関係学部 国際教養学科
教授 吉田 正紀

トウモロコシと大豆に囲まれたイリノイ大学

アメリカ中西部の夏は一際（ひときわ）暑い。でもその頃になり，町を一歩出ると，背丈より高いトウモロコシと緑あざやかな大豆に覆われる風景が見渡す限り展開するようになる。1970年代後半から1990年にかけて，私が留学していたアーバナ・シャンペーンは，シカゴから南に約200キロ，車で約2時間半，飛行機なら40分ほどで到着する人口約18万の静かな大学町である。

アーバナ・シャンペーンには，1868年，地域の農業や工業技術の開発のために設立されたイリノイ大学がある。学生数約4万2千人（2007年），18の学部と3千人の教員を擁する中西部屈指の州立大学である。1970年代から80年代にかけて，本学部からも学生が語学研修先として，あるいは秋山正幸元学部長や佐藤三武朗学部長をはじめ多数の教員が海外出張の派遣先として，交流があった大学でもある。

イリノイ大学への留学

私は1978年，西イリノイ大学で1年間語学研修を受けたあと，イリノイ大学大学院に入学した。インドネシアをフィールド先として，長期的に研究したいという希望もあり，家族をともない，都会から離れた生活し易そうなアーバナ・シャンペーンを選んだ。1980年代は，経済バブルの最盛期であり，アメリカでは日本企業による不動産の買収や自動車を中心とする日系企業の進出が続いていた頃である。近くの町ブルーミントン・ノーマルには三菱自動車が進出していた。

イリノイ大学は世界大学ランキングで25位（2010年），さらに，全米の大学ランキングで10位以内に入っている学部には，工学，コンピュータ・サイエンス，図書館情報学，会計学，心理学，物理学がある。このように，非常に高い教育と研究レベルの大学として評価されているため，日本人を含め，海外からの留学生も多い。当時日本の企業もMBAのプログラムに多くの社員を派遣していたし，会計学を中心としたサバティカルの教員も毎年やってきた。

イリノイ大学図書館

人文・社会系の院生にとって，講義の履修，研究室での作業，TAの仕事のほかは，図書館で過ごすことが多い。ここでは，大学の図書館の全体像を紹介する。

キャンパスの中央部には，緑の芝生に覆われたQuadと呼ばれる長方形の広場があり，その北に宿泊施設やカフェテリアや娯楽施設のあるイリニ・ユニオン（学生会館）がある。地下トンネルで繋がっているメイン・ライブラリーと学部生用図書館はその南に位置する。

▲ イリノイ大学図書館

次頁に続く▶

メイン・ライブラリーは，地下1階，地上6階の重厚感ある建物である。2階にあるリッファレンスルームの天井の高さに驚かされる。イリノイ大学全体での蔵書数は1000万冊を超え，州立大学では全米一の規模で，全米の図書館の中でも3番目の規模を誇っている。

メイン・ライブラリーの中には，歴史・哲学・新聞，イリノイ消防研究所，国際地域研究，文学・言語，応用健康科学，古典，教育・社会科学，商学，イリノイ史とリンカーン，地図，レアーブック，大学アーカイブスなど分野別の図書室がある。さらに，建築，工学，バイオテクノロジーなど学部ごとに20ほどの図書館がある。そのうち1997年に設立されたグレインガー工学図書館は工学に関する図書館として，全米一の施設と規模を誇る。また各学生寮に敷設されたレジデンスホール・ライブラリーは学生にとって極めて便利な存在となっている。

大学図書館の利用

大学図書館の開館時間は春と秋学期と夏の学期で異なるが，通常の学期の閉館時間は午前0時である。そのため，寮や近くに住む学生は夕食後も，図書館を利用することができる。私も毎日，深夜まで図書館で過ごしていたものだった。金曜日や週末は通常より早く閉館するが，日曜日はおそくまで開館している。寮に帰る女子学生にはエスコートサービスもあると聞いた。

私は自分の専門の書籍と雑誌が近くにある教育・社会科学図書室をよく利用していたが，院生なら自由に開架式のメイン・スタック（書庫）に出入りできたし，申し込めば，鍵つきの個室（キャレル）を利用できる。アジア図書館には，日本語の新聞，雑誌，書籍などがあり，日本人のライブラリアンや学生アルバイトも働いていたので，寛（くつろ）ぐこともできた（現在は他の地域図書館と合併して存在せず）。

他の図書館からの書籍の借用や複写は無料で提供してくれた。常に多数のライブラリアンが待機していて，学生のさまざまな要望に応えてくれるのには助かった。帰国後，最新の専門雑誌や毎月発行されるDissertation Abstract International（新しい博士論文の要旨）にすぐにアクセスできないこと，米国にいるのと同様な研究環境で，研究がすすめられないことを知るのは辛いことであった。

▲ メイン・ライブラリー

大学図書館とキャンパスの変化

イリノイ大学に在籍中，またその後の訪問から，学生生活と図書館に起きた著しい変化は，コンピュータの利用，書籍の電子化，キャンパスのアジア化（日本人を除く）であろう。

1970年代後半，レポートや論文はタイプライターを打っていた。その後，エレクトリック・タイプライターや修正用のカセットが普及したり，ワードプロセッサーを用いていたが，80年代に入ると，アップルやIBMなどのパーソナルコンピュータが瞬く間に普及し，図書の検索や論文作成はもはやこれを使用せずにはできなくなった。

2011年の夏にイリノイ大学を訪れたときには，さらに多くの変化が生まれていた。地域や分野ごとの図書館が，電子化や予算の関係で縮小したり，合併したりしていただけでなく，多くの専門雑誌のバックナンバーが存在せず，電子化（e-journal/e-book）されていたことである。図書館でバックナンバーを直接見るのが，米国図書館の訪問の重要な目的の一つであったのだが，今や自らパソコンを用いて，検索・入手が可能なのである。すなわち，JSTOR（本学部でも利用可）などを利用し，目的の論文を探し，コピーすることもなく，自らのUSBメモリーに入れれば良いだけとなった。2004年に訪問した折には，まだそのようなことはなく，バックナンバーの論文を大量にコピーしていたものだった。

もう一つ，キャンパスの風景で変わったことがある。キャンパスのあちこちに中国人と韓国人の学生が目立つのである。韓国の焼き肉や中国料理のレストランも目立つ。日本人学生とは出会うことはほとんどなかったが，ユニオンの地下のカフェテリアのスシや丼ぶりもの，町のスシショップはなぜか健在であった。

私が30代から40代にかけ過ごした中西部の町と大学は，変わらないところを残しながら，日々新たに変化している様子がうかがえる。

▲ 学部生用図書館

▲ あまり使われなくなった図書カードボックス

ESSAY

私の好きな図書館の光景

国際教養学科　安元　隆子

私の図書館の思い出といえば，大学時代，卒論を書いていた頃に遡る。萩原朔太郎をテーマに選んだ私は，文献目録ノートを手書きで作り，片端から資料を図書館から借り，大切だと思うところをコピーし，カードを作った。嵩(かさ)むコピー代は仕送りの大半をしめ，一日パン一つで暮したこともなつかしい思い出だ。当時は開架式ではなく，希望する図書をカードに書き込み，カウンターに出して本を受け取った。せっかく書庫から出してもらった本も，思っていた内容とは異なる場合も多く，また返却して借り直す。カウンターのお兄さんとも顔なじみになった。図書館の閉館までねばって外に出ると晩秋の夜の冷気が顔を刺す。下宿までの道を歩きながら，疲れているのに心は穏やかな充実感に満たされていた。

今ではインターネットを使って，文献目録を作ることができるようになった。また，本の中身を知ることができるし，直接，本や論文を読むこともできる。そして，遠路わざわざ図書館まで足を運ばなくても，相互利用や文献複写ができる便利な時代になった。

だが，やはり懐かしいのは，「図書館」という場。本学の図書館で本を探していると，本の背表紙に思いもかけないタイトルを見つけ，思わず手に取り，寄り道をしてしまう。誰もいない暗い書庫は知の宇宙であり，床が軋む音を聞きながら彷徨(さまよ)う私は小さな旅人だ。無限な知の宇宙の果てを見届けてみたいと思うけれど，それは叶わずほとんどの人は生を終えるのであろう。己の存在の小ささを実感するのも図書館なのである。

しかし，人はやはり知の旅を続ける。私は国会図書館での仕事を終えて家路を急ぐ時，夕暮れに浮かぶ議事堂を見るのが好きだ。その時，私は知の宇宙と格闘した充足感に満たされているから。そして，同じように家路を急ぐ利用者の背にも不思議な連帯を感じている。また，ロシアのモスクワやサンクトペテルブルグの国立図書館の厳粛な雰囲気に満ちた閲覧室では，古いランプ型の灯火の下，人々はひたすらペンを走らせ文献を写している。図書館の中は暖かく，窓辺には冬の長いロシアの人々が「緑」を愛して置いた植物の鉢が沢山ある。その窓の外には厳寒の白い雪が絶え間なく降り続いていた。きっとこの部屋は 100 年前も 100 年後も同じ光景なのだろうと思わせた。遥かなる人間の知への旅が続いていることを感じさせる，これもまた，私の好きな図書館の光景である。

ESSAY

私と図書館

短期大学部食物栄養学科　小橋　惠津

近年，電子媒体の発達により，図書館の役割が少しずつ変化してきているように思えます。

私が大学生の頃は，図書館は，参考書を借り，試験前の勉強をするところでした。その後，医者になり医局に入ると，疾患の検討や学会発表の為の文献検索に迫られ，医学部図書館に通ったものでした。しかし，必要な雑誌が十分そろっていない事が多々ありました。その頃，私立医科大学の中で，図書館内容が，国内及び外国の雑誌が一番充実していたのは，慶応大学の医学部でした。日大の図書館から紹介して頂き，必死に信濃町に通い，私のあこがれていた慶応の医学生になった気分を味わうことができたのは，今になるととても良い思い出の一つです。慶応大学の図書館は，静かなレトロな中にも，重厚な雰囲気のあるとてもすばらしい図書館でした。

また，駿河台病院に勤務中は，板橋の医学部図書館に行くには時間がなく，順天堂大学の図書館にも通わせて頂きました。順天堂の図書館は，広く明るい雰囲気でした。

図書館にも個性があります。蔵書の並び方，閲覧室の環境，そこを行き交う学生や先生達の様子，それらは様々で，雰囲気が異なり，図書館巡りは楽しいものです。

しかし，現代は，ネット社会です。こちらに移動して，学生達に，論文作成の為の文献検索をするように話しますと，まず，YahooやGoogleで文献検索をはじめます。ですから「孫文献」を調べるようにと話をしても通じないのにはびっくりしました。

国際関係学部の図書館は，貸出期間も長く，学生達に対して，とても優しいと思います。私には，利用している学生と利用しない学生の差が非常に大きく思えて残念です。

昨年の夏，シラキュース大学を訪れたとき，図書館も見学させて頂きました。沢山の学生が利用していました。蔵書も沢山ありましたが，それよりインターネットサービスが充実しているのにはびっくりしました。さすがアメリカです。私は行ったことがありませんが，話に聞くネットカフェのように，1人1人が独立して勉強ができるようになっていました。でもやはり，私は古い人間の部類になるのでしょうか，取りかかりはネットでも，その後は自分でキチンと調べ，その文献から更に必要な文献を取り寄せて，勉強する事が大切だと信じて，今でも学生を指導しています。

世の中が，紙ベースから，電子ベースに代わってきています。電子カルテしかり。書籍も。電子書籍がもの凄い勢いで広まって来ています。

これからの図書館は，新しい蔵書の保存方法，インターネットサービスの充実を考慮に入れて，少しずつ変化して行かなければならないのではないでしょうか。でも，個人的には，世の中の変化について行けず，少し寂しさを感じている今日この頃です。

● WRITTEN BOOKS 刊行物紹介

『原発に頼らなくても日本は成長できる ―エネルギー大転換の経済学』

円居　総一 著［ダイヤモンド社］

福島第一原発の苛酷事故で原発の安全神話は崩壊した。だが，原発を止めれば電力不足や料金の高騰から日本は潰れるとの懸念も根強く，原発問題は結局「命か生活か」の二項対立に陥っている。本書では，両立が可能な第3の選択肢を見出していくことが先決との問題意識の下で，日本のエネルギー選択の問題を初めて体系的に明らかにしている。

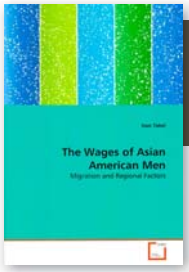
まず技術的安全性論議に加え，広範なデータに基づき原発の発電コストの比較検証とその社会経済システムとしての合理性を予断なく検証し，事　実の解明を進めている。その上で，両立の選択肢は，設備能力が十分な火力でまず原発を代替し，新エネルギーに繋ぐことにあることを実証的に説き明かす。火力燃料の安定確保や価格の問題は最近の世界的な天然ガスの採掘革命で払拭されてきた。電力制約論などの虚構を排し，この連続的エネルギー転換を如何に経済・社会の再生とさらなる成長に繋げて行くか，その具体策も併せ提示している。基礎的なことからも解説しているので，原発やエネルギー問題を日本経済の将来と併せてもっと知りたい学生にも是非一読を勧めたい。

『くれない燃ゆ　唐人お吉』

佐藤　三武朗 著［海拓舎］

出会いは嵐のように，やって来る。お吉と私の関係もまた，そうであった。

幕末から明治という疾風怒濤の時代を生き抜いたお吉は，もっと多角的な視点から描かれて良い。そう思った私は，数え切れないほど，下田を訪れ，お吉に関する資料を収集した。直感は不意に襲う。どの幕臣よりも，お吉はタウンゼント・ハリスを通して，アメリカを知った。西洋人の価値観を学んだ。そう思った私は，遮二無二，近代的なお吉像を描くことに取り組んだ。美しさと哀れさ，逞しさと優美さを兼ね備えた誇り高い大和撫子の描出に専念した。これまでに，水谷八重子，佐久間良子，太地喜和子が舞台でお吉を演じた。時代に残る女優がお吉を演じてくれることを夢見ながら，私はお吉像を造形した。



『The Wages of Asian American Men ―Migration and Regional Factors』

武井　勲 著［VDM Publishing］

合衆国において「人種」は不平等や格差の中心的要因として残るが，アジア系アメリカ人に対する労働市場差別もまた，大きな論争の一つである。

本書では，先行研究で扱われることが少なかった地域移動をはじめとする様々な地域要因に着目し，アジア系男性労働者の賃金水準を考察している。合衆国国勢調査データを用いた分析から，居住地域や地域分布とアジア系の賃金の関連性が明らかになってくる。主な理由として，カリフォルニアをはじめとする生計費の高い地域への偏住傾向が挙げられる。実際，生計費に加えて人口動態的要因等を統計学的に考慮すると，白人の賃金水準と比較してもアジア系が実質的に不平等にあるとは言えないことがわかる。アジア系が第二次世界大戦以前の労働市場において深刻な人種差別に直面していたことを考えると，本書が指摘する社会経済的地位の向上は，彼らにとって歴史的変化を意味するであろう。

『不道徳な女性の出現 ―独仏英米の比較文化』

今村 武／橋本 由紀子／小野寺 玲子／内堀 奈保子 著［南窓社］

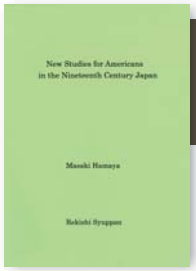
18世紀から19世紀にかけて，ヨーロッパおよびアメリカの文学や絵画では，不道徳と見なされ糾弾される女性が多く現れる。近代市民社会が成立していく激動の時代，自由と平等を謳ったはずの社会では，一方であらゆる価値観の画一化が促され，社会秩序維持のための道徳規範が厳格化される。そうした近代社会の内実を最も顕著に映し出すのが，当時の規範から逸脱した女性たちだった。

本書では，「不道徳な女性」たちがこの時代どのように生まれ，どのように描き出され，どのような意味を与えられているのかを，18世紀ドイツ文学，19世紀フランス文学，イギリスのヴィクトリア朝絵画，18世紀末アメリカ文学をそれぞれ専門とする研究者が考察する。

『文豪の翻訳力 ―近現代日本の作家翻訳 谷崎潤一郎から村上春樹まで』

井上　健 著［武田ランダムハウスジャパン］

大正や昭和初期の小説家たちは，しばしば作家修業の場として，外国文学の翻訳を試みた。谷崎潤一郎，佐藤春夫，芥川龍之介が，ポー，ボードレール，ゴーチェなど19世紀作家に赴いたのに対して，堀辰雄，中島敦はコクトー，プルースト，ハックスリーなど同時代ヨーロッパ文学者の方法に目を向けた。彼ら物語作家たちを翻訳に駆り立てたものは，日本語を，自国文学を変容させたいという欲望であったのか，それとも，外国文学と自国文学との間の，真の対話関係への志向であったのか。比較文学研究，翻訳研究の立場から，大正作家から，池澤夏樹，村上春樹など戦後作家に至る「作家翻訳」の系譜をたどり，その文学史的意義を明らかにせんとする。



『New studies for Americans in the Nineteenth Century Japan』

濱屋　雅軌 著［歴史出版］

日米両国にとって，19世紀の両国関係の研究が重要であることは，言うまでもない。この世紀には日米関係が本格的に始まり，ダイナミックに展開したからである。そして，この分野に関する研究がこれまでいくつも行われてきた。しかしその反面，十分に研究・解明されていないテーマが数多く残されている。本書はその展開のなかで，このような19世紀日米関係に関する従来からの研究のもつ問題の一部を，両国関係形成期の前近代における混乱をともなった政治経済関係とアメリカ人男性，両国関係形成後の近代における安定した社会文化的関係とアメリカ人女性に着目することによって，解決に導いている。

所蔵資料紹介

ペリー艦隊日本遠征記

国際総合政策学科　川副　令

マシュー・ペリー提督の名前は，我が国で歴史教育を受けた人間ならば，一度ならず聞いたことがあるはずだ。ペリーが「黒船」を率いてアメリカからはるばる来日したこと。江戸幕府の役人と交渉を重ねて「鎖国」政策を改めさせ，日米和親条約を締結して日本を「開国」へと導いたこと。ペリーが来航したとき，江戸の民衆が，もくもくと煙を吐く蒸気船の姿を見て驚愕したこと。その程度のことは，誰でも学んだ記憶があるはずだ。

ここに紹介するのは，そのペリー提督が日本での条約交渉を終えてアメリカ合衆国に無事帰国した後，議会上院に提出した報告書を，議会からの命令に従って 1856 年に出版したもの（初版本の一つ）である。英文の正式タイトルは “Narrative of the Expedition of an American Squadron to China Seas and Japan, performed in the years of 1852, 1853 and 1854, under the Command of Commodore M.C. Perry, United States Navy, by Order of the Government of the United States.” という。この本はアメリカの知識人サークルにおいて極めて好評を博し，1856 年中にも幾度か増刷されている。本館に所蔵されているのは，ワシントンDCのバーバリー・タッカー社が印刷したもので，これは1855年1月22日の議会命令によって印刷された 5000 部の一つと推察される。なお，この版は本館において貴重本扱いとなっており，閲覧に制限がある。しかし，同書の復刻（1967 年）版も本館には所蔵されており，こちらは誰でも借り出すことができる。また，この United States Japan Expedition は全３巻（変形A４版）で総頁数は 1600 を超える大部であるが，原典のスタイルを維持しつつその全訳を行った『ペリー艦隊日本遠征記』（栄光文化研究所，1997 年）も，本館に所蔵されている。

さて，United States Japan Expedition 第１巻はペリー提督自身や他の乗組員の航海日誌を基に歴史家ホークスが編纂した航海記である。読み物としても大変に面白い。この第１巻は日本でも既に戦前から幾度か邦訳普及版が公刊されているので，一部なりとも読んだことがある人も多いだろう。第２巻は航海中にペリー達が立ち寄った地域の植生や風俗，鉱物資源や経済活動等についてのレポート集で，巻末の付録中には日米和親条約（神奈川条約）の英語版と日本語版のコピーが採録されている。実は，日米和親条約はその批准をめぐってトラブルが生じたのだが，これは一つには「批准」という手続きの意義を日本側が理解していなかったことに因るものであると同時に，もう一つには批准手続きについて定めた同条約第12 条の内容について英語版と日本語版とでズレがあることに因るものでもあった。このトラブルとその解決の経緯は第１巻ではほとんど触れられておらず，第２巻に収録されたアダムス参謀長の書簡に詳しく記されている。最後に，第３巻は航海中になされた天文観測の詳細な記録である。これは当時の航海上の必要に応えて作られたもので，今日の一般の読者にはあまり関係のない部分と言える。

ところで，ペリー来航や日本「開国」をめぐって一般に語られている逸話には，単に不正確なものばかりでなく，完全に誤っているものも少なくない。試しに私の知っている学生の何名かを捉まえて聞いてみたところ，ペリー以前に日本の「開国」を目的として来航したアメリカ海軍提督がいたことを知っている者はごくわずかだった。（ペリー来航の約７年前にジェームズ・ビドルが二隻の「黒船」を率いて浦賀に来航している。）また，ペリーが率いていた「黒船」はすべて鉄製の蒸気船であると思っていた学生もいた。（黒船は腐食防止等のためタールを塗った黒い木造船。帆船も含むし，蒸気船であっても帆は付いている。当時はまだ鉄製の船はなかった。）

もちろん，歴史に関する誤解や思い込みは誰にでもあることで，専門の歴史家とてそうである。紹介者は日本開国史の専門家ではないが，19 世紀後半から 20 世紀前半の国際法史を専攻する者として，当時の日米交渉がいかなる知的条件の下で行われたかという点には，前々から関心を有していた。今回，そうした観点から United States Japan Expedition を精読する機会を得て，衝撃を受けた記述が幾つかあったので，最後にそのうち二つを紹介したい。

まず，砲艦の威力を背景とする強制的「開国」の是非についてペリー自身が述べた件であるが，彼は列強による中国や日本の国内問題への介入は正当化されえないとしつつ，しかし「地球上のあれほど広く且つ生産的な部分が彼らのためだけに創造されたとは絶対に考えられない」と言い，国際法の下で日中両国に対して貿易を強いることは当然許されると結論している。この「土地は誰のために創造されたか（＝必ずしもその住民のためではない）」という反語疑問は，先住民を彼らの土地から追放してアメリカ植民地を建設した際にも用いられたものであった。一層衝撃的なのは，以上の記述に関連して，ペリーが中国と日本を対比しつつ次のように述べていることである。「中国国民がこれまで示してきた非社交的な，あるいは傲慢と言ってもいいような外国人排除の姿勢は，もはや容認できない。（中略）外国との自由で拘束を受けない関係は自分たちのためにもなるということを，日本人のように中国人も理解するべきである。」「（アヘン戦争の）唯一の過ちは，無知で理性のない中国国民に，彼らがいかに弱い立場にあるか，そして自分たちは世界の誰よりも優秀であるという思い込みがいかに愚かなものであるかを痛感させるまで，戦争を継続しえなかったことであろう。中国はより徹底的にヨーロッパ化されるべきである。（以下略）」『遠征記』が好評を博したことから推察されるように，ペリーのこの極端な中国蔑視の視点は，必ずしも彼独自のものではなかったろう。

もちろん，これらの記述だけでペリーという人物やその業績を評価するのは正当でない。ペリー提督とはどのような人物だったか，なぜフィルモア大統領は並み居る外交官達ではなくて，海軍軍人に過ぎないペリーに欧米諸国と日本との最初の条約締結交渉を全面的に委ねたか，こういった問題については既に多くの研究が発表されている。本館にも所蔵されているので，併せてご参照いただきたい。

▲ M.C. Perry, United States Japan Expedition, 3 Vols, 1856.
（邦訳『ペリー艦隊日本遠征記』1856年，全3巻）

推薦図書紹介 ● RECOMMENDED BOOKS

国際総合政策学科推薦図書

『フィールドワークからの国際協力』

荒木　徹也／井上 真 編［昭和堂］

冨岡　丈朗

国際協力を実践するうえで「フィールドワーク」という言葉が良く出てくる。その理論や手法，報告のまとめ方などの方法論の他に，現地での滞在に関わるロジスティックや食事など実際の調査には様々な事を考えながら計画しなければならない。本学でも海外ゼミを実践しておられる先生方にもちょっと敷居の高い言葉ではないだろうか？　本書は，その「フィールドワーク」について，若手の研究者やNGOでの実践者たちが豊富で具体的な事例を交え，その考え方や調査対象者との接し方など広範囲にわたって考察したものである。何より本書は，「フィールドワーク」を経験してみたい大学生や大学院生を対象に書かれており，「フィールドワーク」がどのように現地に貢献でき，国際協力に繋がるのか？といった筆者の悩み（国際協力を実践する者の共通の悩み）にも言及されている。自分の研究で「フィールドワーク」を考えている学生諸君には，その方向性を示す最良の一冊になるだろう。

国際教養学科推薦図書

『そして、僕はOEDを読んだ』

アモン・シェイ 著／田村　幸誠 訳［三省堂］

田中　拓郎

オックスフォード英語辞典，通称“OED”は，世界最大の辞書刊行物。編纂に150年以上の歴史を要し，語彙収録数約60万語を誇り，現在では全20巻から成る。本書はそのOEDを1年かけてすべて通読した男の物語。肘掛け椅子に座り，エスプレッソコーヒーを片手に，辞書編纂者の恋人と語らいながら，ひたすら読む。その過程は「辞書を読む」という営みで満たされる好奇心と知的興奮に溢れている。役に立たない知識を身につけることの素晴らしさを，ぜひとも体感してほしい。なお，本書には筆者が見つけた奇々怪々な英単語がアルファベット順に紹介されている。silentiary（「黙れ」と命令することを職とする役人），exsibilation（役者を野次って舞台から追い払う），desiderium（手離してしまったものをもう一度所有したいと願う気持ち）などの珍妙な単語を楽しんでほしい。

国際関係学科推薦図書

『〈中東〉の考え方』

酒井　啓子 著［講談社］

横田　貴之

中東情勢に興味はあるが，何だかややこしいので敬遠している。そんな方は，ぜひ一度本書を手に取って欲しい。一般的な時事解説書とは異なり，本書は中東情勢を表層的に説明するものではない。著者・酒井啓子氏は，現代中東が抱える諸問題の根源を明らかにすることで，難解な中東情勢を読み解こうとする。本書で取り上げられているのは，石油，パレスチナ問題，冷戦，イスラーム，メディア，アイデンティティーである。いずれも中東理解に不可欠の根源的問題であり，その明快な分析は「そうだったのか」と我々を納得させる。さらに，著者はこれら諸問題を近現代の国際政治の中に位置付けて解説する。中東の複雑怪奇な出来事が，実は世界情勢と密接な関係にあることがよく分かる。本書の刊行は「アラブの春」（2011年）の前年だが，その内容は今なお色褪（あ）せていない。一旦本書を読み始めれば，絡み合っていた中東情勢の謎が次々に解けていくことであろう。

国際文化学科推薦図書

『ヤンキー・ガールと荒野の大熊―アメリカの文化と文学を語る』

亀井　俊介 著［南雲堂］

高橋　章

本書は長年に亘る著者のアメリカの歴史，文化，文学研究に関する講演集であり，しゃべり言葉で書かれているため読みやすく，話はマリリン・モンローにまで及ぶ。

一日本人研究者の〈おぞましい〉軌跡として，第二次大戦後の日本へのアメリカの決定的影響力のもとでアメリカ研究の志を持ったこと。このところアメリカの文学・文化の研究は，一面で著しく専門化ないし細分化され，他面では，途方もなく中身を拡大してきた現状を述べている。すなわち西欧中心主義，白人中心主義の文学・文化観に対してアメリカ国内の人種，経済，ジェンダーなどにおけるマイノリティグループの進出がアメリカ研究の中身を複雑，多彩にしており，もはやひとりで受け持てる作業ではなくなった。しかし，どのように視野が狭く，学識が浅くとも，その人の「生」と「心」に根ざした思いの展開，すなわち「思想」の営みを著者は重んじて研究したいと，冒頭でその情熱を語っている。

国際交流学科推薦図書

『ふしぎなキリスト教』

橋爪　大三郎／大澤　真幸 著［講談社］

熊野　留理子

この本は，キリスト教を理解しなければ，ヨーロッパの思想は解らないし，現代日本についてさえも解らない，と主張する。日本は「近代」の基盤となっているキリスト教について無知のままに，「近代化」してきた。

日本はキリスト教文明とはきわめて異なる伝統文化を持っているが，明治維新以来，西洋のキリスト教文明の思想部分を排除し，科学技術だけを取り入れ，近代化をしたと言われる。敗戦後アメリカの占領下，キリスト教を土台とした民主主義の教えを取り入れなければ日本は平和を愛する文明国になれないと命令され，「普遍的」価値観を謳(うた)うアメリカ民主主義を移植された。しかし，なにかしっくりとこないものがある。西洋文明の移植が日本に合わず，機能不全を起こしているのではないか。疑問に答えてくれるのがこの本である。

比較宗教社会学者の橋爪大三郎とキリスト教について洞察力を現す大澤真幸との対談式の本だ。キリスト教のことは知っているつもりが実はわかっていなかった人にも解りやすく，かつ知的好奇心を満たしてくれる本である。また，日本の多神教的な宗教観との比較をしながら，一神教であるキリスト教が歴史・文明にどのような影響を残してきたかを解明する。軽快な文章なので，いっきに読み切れる。鋭い発想の展開が広がる名著だ。今日のグローバル化による文明の対立の構図も見えてくる。

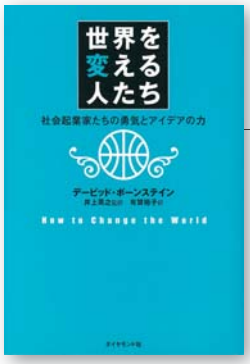
国際ビジネス情報学科推薦図書

『働くということ』

ロナルド・ドーア 著／石塚　雅彦 訳［中央公論新社］

大淵　三洋

「20世紀の終わりまでに，私たちはみな5時間程度だけ働くようになっているだろう…」というジョン・メイナード・ケインズ（John Maynard Keynes）の80年前の予言は，見事に外れた。先進諸国，特に，EU（European Union），アメリカ，イギリスなどでも，経済競争力強化を理由に労働時間短縮は，進んでいない。それどころか，働く機会を失う人々が蔓延している。グローバリゼーションが加速する中，所得の格差も急速に拡大しつつある。雇用機会や賃金において拡大する不平等に歯止めはかかるのか。著者が，半世紀にわたって「働くということ」の意義を問い続けてきた思索の到達点ともいえる著作である。ぜひ，就職活動中のビジネス情報学科の学生に読んでもらいたい書物の一つである。



商経学科推薦図書

『世界を変える人たち―社会起業家たちの勇気とアイデアの力』

デービッド・ボーンスタイン 著／井上　英之 監訳／有賀　裕子 訳［ダイヤモンド社］

宮川　幸司

現在，世界規模でさまざまな問題が持ち上がっている。教育や医療の不備，環境破壊，貧困，青少年犯罪などである。これらの問題は，政治の問題として各国政府が取り組むべき問題ではあるが，政府の手だけに任せておいてすべてが解決できるような問題でもない。それだけ問題の根は深く，また多岐にわたっている。

それらの重要な問題を解決に導くために新しいアイデアを提供し，実行していく人を社会起業家という。それらは，これまであったような一過性の寄付や慈善事業とは違い，永続的に社会変革が可能となるようなビジネスの形態をとる。つまり社会を良くするビジネスとでも言えようか。

本書では，世界を良く変えるために社会起業家によって行われているさまざまな活動の紹介がされている。また，それら社会起業家を支援する組織として，ビル・ドレイトンが立ち上げた「アショカ」の活動の紹介も行っている。若い学生に是非読んでもらいたい一冊である。

食物栄養学科推薦図書

『〈現代家族〉の誕生―幻想系家族論の死』

岩村　暢子 著［勁草書房］

篠原　啓子

内閣府の平成23年「食育の現状と意識に関する調査報告」では，「食育に関心がある」「食育という言葉を知っている」人の割合はそれぞれ70.5%，74%であった（目標値90%以上）。平成17年の食育基本法成立により食育に対する周知状況や国民の関心度からそれなりに食育は浸透しているとは言える。食育についてここで論じることはできないが，家庭は最も身近で重要な栄養教育の場である。特に幼少期において家族が顔を合わせ，食卓を囲むことで食の知識や食の態度は形成される。

本書は子供を持つ1960年生まれ以降の主婦とその母を対象に家庭での食事作りと食の実態をインタビュー形式で調査したものをまとめている。著者は本の中で現代の主婦たちは，本などをもとに料理が作れる「情報処理能力」はあっても，毎日食事を作り続ける「習慣的な能力」は身についておらず，またその母もそれを教えたり伝えたりしていないと分析する。お金さえあれば料理しなくとも食べ物に不自由のない時代であり，食の環境は時代により造られるものであるが，今の若者が食育について何を学んでいったらよいか考えるきっかけになる一冊である。

STUDENT'S VOICE

図書館へ行ってみましょう。

国際関係学科 4年 馬渕 俊旦

私は入学して間もない頃は，図書館も読書もそれほど好きではありませんでした。授業の空き時間を埋めるため，静かな場所で過ごしたいと思った…それがきっかけでした。それから，少しずつ本を読むようになり，以前よりも図書館へ通う回数が増えました。読書も好きになりました。

図書館を気に入っている理由は２つあります。

一つ目は「ニュースをより深く理解するヒント」や「授業をより理解できる知識」が転がっていることです。私は海外の映画やドラマが好きなので，映像資料をよく利用しています。例えば，Michael Jackson（マイケル・ジャクソン）の“This is it”。Michael Jackson にそれほど興味があったわけではなく，彼の死を知ってから，見てみようかと思った程度でした。図書館に足を運ぶと“This is it”が目立つように置かれおり，時間に余裕のあったことも重なって，見る気になったのです。Michael Jacksonの魅力を知り得たと同時に図書館の方々が，その時期や時代に合わせた情報提供をしてくれていることを知りました。

図書館１階閲覧室の入口の近くには，お薦めの本が並べてあり，思わず手に取ってみたくなります。毎月，新着図書として，たくさんの本が並びます。また，５月の日・EU フレンドシップウィークの展示物や貴重書の展示会も見逃せません。

二つ目の理由は，当然のことですが専門書が充実していることです。ゼミでベネズエラの大統領の Hugo Chavez（ウーゴ・チャベス）について学ぶことになり，ゼミのみんなで Hugo Chavez に関する資料を読みました。私がパワーポイントでまとめ，発表することになったこともあり，彼のことをもう少し詳しく知りたいと思い，図書館に寄りました。Hugo Chaves は日本人にとって馴染みのない外国人なので，資料がないのではないか…という思いもありましたが，見つけることができたのです。大学から家に帰る電車の中で借りた本を読み始めました。読んでいるうちに，もう１冊くらい借りてくるべきだった…もう少し資料を集めたい，と思い，後日地元の図書館へ向かいました。“ウーゴ・チャベス”と検索しても，また“Hugo Chavez”と検索しても，残念ながら，そこでは見つかりませんでした。やはり，大学図書館は専門書が充実していると実感しました。それからは，授業などで課題が出た時は必ず図書館を利用します。本とインターネットを使いながらのレポート作成も可能です。

きっかけは，どんな理由でもいいのです。皆さんも，図書館へ足を運んでみてはいかがでしょうか。

国際機関資料室から ●INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER

日・EUフレンドシップウィーク2012
「イギリス展 ～ロンドン五輪を記念して～」開催

EU情報センターを設置している国際機関資料室では，毎年5月9日のヨーロッパデーを記念して，日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は，5月9日(水)から5月31日(木)まで，図書館1階閲覧室及び国際機関資料室内にて，「イギリス展～ロンドン五輪を記念して～」というテーマでイギリスにスポットをあてた展示会を開催しました。

1階閲覧室では，英国政府観光庁が今年作成したポスター「GREAT」シリーズやイギリスが4つの国から成る立憲君主国家であることなどの基礎知識をまとめたもの，イギリスの歴史等をパネル展示しました。

2階の国際機関資料室では，「イギリスの風景」と題し，さまざまな写真を展示しました。ロンドン塔やビッグ・ベンだけでなく，美しい田園風景が広がるコッツウォルズや北アイルランドの豊富な自然等の写真を展示し，また，「イギリスの文化いろいろ」と題したコーナーでは，「ハリーポッター」や「ピーターラビット」，「ジェームスボンド」や「ビートルズ」などの馴染み深いものを，図書館所蔵の関連図書や視聴覚資料などと共に紹介しました。

▲「イギリスの風景」の写真展示の様子

▲「GREAT」シリーズのポスター展示

恒例のクイズでは，EUグッズや日大グッズを景品としました。また，期間限定で，紅茶の試飲会を開催し，マーマレードやショートブレッドの試食を兼ね，アフタヌーンティー気分を味わっていただくことができました。

今年は，多くの1年生や一般の方が来館し，イギリスだけでなく，他のEU諸国やEUに関心を持っていただく良い機会になったと思います。

日本大学国際関係学部図書館報
BIBLIOTHECA
第8号
通巻第153号
発 行 日／2012年10月1日
編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会
http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/